

玉城福子著（人文書院 2022年）
『沖繩とセクシュアリティの社会学』
ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す沖繩戦・米軍基地・観光』

佐喜真彩*

1995年、三人の米兵による少女強かん事件に対する抗議の目的で8万5千人が集った県民大会を牽引したのは、80年代から沖繩における性暴力を個人的な問題ではなく政治・経済・軍事に関わる構造的問題によるものだと見抜いていた女性たちであった。95年の沖繩の反基地運動で注目されるべきは、その規模よりもそれがジェンダーの視点を含み込むことによって新たな様相を呈したということである。彼女たちは事件直後、まずもって被害女性を孤立させないよう「あなたは悪くなかった」というメッセージを公の場で表明した上で、『復帰』後最大と言われる反基地運動を牽引し、その後も「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」（以下、「行動する女たちの会」）を発足して現在に至るまで活動を続けている。彼女たちの活動は、沖繩にとどまらず、地域や国家の境界を超えて、東アジア、プエルトリコ、ハワイ、グアムなどの米軍基地の周辺で生活する女性たちとのつながりを築くことによって、2004年には「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」の結成へと導いた（秋林 2004）。今、「行動する女たちの会」に注目する意義は、それが沖繩というローカルな反基地運動において外せない担い手であるということだけではなく、米軍を中心とする現在の軍事・植民地主義の世界ネットワークへの有効な抗いとなっていることにある。

本書は、80年代から沖繩のフェミニストたちが問題提起してきた沖繩におけるセクシュアリティをめぐる言説を、フェミニズムの視点にポストコロニアル研究を交差させて分析する重要な試みである。著者の問題意識は明快である。それは、「性暴力に批判的なフェミニストや植民地主義に抗す知識人であって

も、植民地主義とセクシュアリティの関係性に気が付きにくく、「この領域がこれまで社会的にも学問的にも不可視化されてきた」、ということだ（78頁）。具体的には、90年代以降に日本社会で論じられてきたセックスワーク論などの新しい性をめぐるフェミニズムの認識や枠組みだけでは、沖繩における性をめぐる暴力の植民地主義的な側面が見えず、一方でポストコロニアリズムのアプローチを受容した沖繩研究では、ジェンダーやセクシュアリティが重視されてこなかった、という（23～24頁）。こうした問題意識から、本書は竹村和子が言うところのポストコロニアル・フェミニズムを分析視角として採用する。その視点から、沖繩における性暴力と売買春をめぐる言説の複数の事例を取り上げ、植民地主義あるいはジェンダーのみの一元的なアプローチの限界を示しつつ、性をめぐって沈黙を強いる言説の配置と排除のメカニズムを描き出している。

本書は3部6章に序論と終章が加わる構成である。第1部「問題構成と視角」では、沖繩研究の蓄積を概観した上で、本書を貫く理論的枠組みであるポストコロニアル・フェミニズムの有効性が説明される。その事例研究が、続く第2・3部で記される。第2部「沖繩戦と戦後史の歴史表象におけるセクシュアリティ」では、沖繩における性暴力・売買春に関わる記憶／表象が検証される。各章ではそれぞれ異なる事例が取り上げられ、日本のフェミニズムにおいては沖繩に対する植民地主義が、沖繩戦や米軍占領期についての沖繩側の語りにおいてはフェミニズムの視点が欠けていることが実証的に示される。第2部の事例研究から、植民地主義がジェンダーやセクシュアリティ

*立教大学他非常勤講師

に基づく差別に依拠していること、しかし植民地主義への抵抗においてはそれらが見過ごされてしまっているという結果が導き出される。第3部「継続するセクシュアリティの利用と排除」では、性差別主義あるいは植民地主義に抵抗する「われわれ」という言説において、ある特定の女性たち（日本軍「慰安婦」とAサインバー（米兵向けの風俗店）の女性たち）が排除され、時には利用されてきたという第2部で確認された事態が、表象上のみならず実際の排除につながる効果を生んでいることが比較的最近の事例に基づいて分析される。

第1部の理論的枠組みの整理において、現在、論争の的となっている日本（人）と沖縄（人）を二項対立的な図式において記述することの是非についての議論が触れられている。著者は、日本本土と沖縄との間の植民地主義的権力関係が現在も存続しているという立場に立つが、そうした単純な二項対立的な分析枠組みの限界を見せ、そしてそれを乗り越えようとするために、もう一つの枠組みであるフェミニズムを導入することによって、より「複雑な権力関係」（75頁）を示すことを試みている。第6章の「歓楽街環境浄化運動再考」ではその意図が特によく表れており、行政、警察、地域社会、フェミニズム団体など利害の異なるさまざまなアクターの効果によって、売春女性たちが浄化対象とされ、この一連の運動によって植民地主義が延命しているという複雑な構造を描き出している。日本／沖縄という対置に単純に売春女性の視点を組み込むといった図式的な枠組みでは整理できない状況を浮かび上がらせることに成功しており、

学ぶところが多い。

本書の最も大きな成果は、以上の理論的枠組みと複数の事例研究を通じて、「行動する女たちの会」の活動に結びつくことになった80年代以降の沖縄でのフェミニズム運動が、単に売春女性たちを保護するというパターンリスティックな位置に立つことなく、性をめぐる暴力が軍事・植民地主義の構造的暴力であると告発してきた意義を可視化しているところだと言える。ただ、本書でも数箇所短い言及はありつつもあまり深められていない論点である日米共同の植民地主義について、米国の軍事主義をポストコロニアリズムと切り離さずに掘り下げれば、著者の視点がよりクリアになるのではないだろうか。というのも、米国は第二次大戦後、安全保障という名目で、「反植民地主義」を装いそれを対外的に強調しながら、領土拡大せずに軍隊駐留地の拡大を推し進めた（安全保障帝国主義とも批判される）（池上2014）。また、条約や法のレベルだけでなく、例えば、冷戦期米国の文化的なものにおける沖縄を含むアジア表象において、オリエンタリズムが多く見られる（Klein 2003）。日本／沖縄において継続する植民地主義が国内問題の枠組みにおいて捉えられることが多いが、むしろその状況は冷戦以後の米軍の軍事・植民地主義が主軸となって、日本（人）／沖縄（人）の人種化が生成されながら延命しているという視点が必要なのではないだろうか。とはいえ、80年代以降の沖縄でのフェミニズム運動の意義を可視化している点で、本書は現在の日米による軍事・植民地主義への抗いに力を与える、今必要とされる書物であると言える。

参考文献

- 秋林こずえ, 2004, 「安全保障とジェンダーに関する考察——沖縄「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の事例から」『ジェンダー研究』7号: pp. 73-85.
- 池上大祐, 2014, 『アメリカの太平洋戦略と国際信託統治——米務省の戦後構想 1942～1947』法律文化社。
- Klein, Christina, 2003, *Cold War Orientalism: Asia in the Middlebrow Imagination 1945-1961*, University of California Press.